都道府県別賞一等

頼れる存在

沖縄県　那覇市立仲井真中学校　二学年

嘉数　愛湖

私は幼い頃にアナフィラキシーと診断された。周りの人が食べられるものが私は食べられないという事実に苦しんでしまう時もあったが、沢山の方々の支えのおかげで、今、こうして元気に過ごすことができている。だが、誤食などの理由で食物アレルギーをおこし、入院となることが今までに何度もあり、家族に度々迷惑をかけてしまっていた。

家庭科の授業で、自分の幼い頃のエピソードを聞くという宿題が出された。私は家に帰り、仕事から帰ってきた母に話を聞いた。沢山あるエピソードの中でも母が一番長く語ったのは、私のアナフィラキシーについてだった。私は生後六カ月の時に、離乳食として食べたパン粥がきっかけでアナフィラキシーと診断された。体中発疹でいっぱいな私を見て母は申し訳ない気持ちと、悔しく、悲しい気持ち、そして、不安な気持ちでいっぱいだったそうだ。そんな中、保険という存在に助けてもらったことが沢山あったそうで、

「愛湖がアナフィラキシーで入院になった時、気持ちも落ちこんでいたし、金銭面でも心配な部分があったけど、給付金でのサポートや担当の方の優しい対応に沢山助けてもらったんだよ。」

と、母は嬉しそうな、安心したような表情で当時のことを語った。

他にも、一昨年私が初めて新型コロナウイルスに感染した時にも、保険に沢山助けられたそうだ。

正直、母から話を聞くまで、保険が私にとってどんなものなのか、どんな良い影響を与えてくれていたのか、知っていたことは給付金でのサポートがあるということぐらいで、詳しい内容については全然知らなかった。だけど、母から話を聞いて、私の幼い頃からの度重なる入院も、保険に助けてもらっていたことが分かった。そして、もう一つ分かったことがある。保険という存在が母にとって頼れる存在であり、安心できる材料であったということだ。まだ、子供の入院や自身の入院に限らず、その他の事情で、あの頃の母と同じように不安な気持ちでいっぱいな人もいるかもしれない。でも、色々な頼れる存在や安心できる材料が絶対あることを忘れないでほしい。

これから先、また、保険にお世話になることがあるかもしれない。それでも私は、アナフィラキシーと真正面から向き合い、少しでも改善できるように頑張っていきたい。